

工業蒲田

発行所 東京都大田区蒲田1丁目29番地8
 東京電大(3732)7821(代)組人会
 蒲田工業及編川同行委
 機編関市誌刷所
 印刷所 東京都大田区東矢口3丁目4番17号
 有限会社桑島印刷所

CISの行方

バイクで走った
 見た・話した

防衛大学教授 瀧澤 一郎氏

ソビエト大横断

私は、ご案内のように、二年前にナホトカからフィンランドのへルシンキまで、旧ソ連を約一万四千里、地図でいいますと右から左へ横切って、ロシアのはらわたの奥深くに分け入って、眺めてきました。

しかし当然のことながら、私は、防衛大学で録をほんでるわけで、向こうの人たちもある程度の警戒心を持つていないと思いません。そこで一策を案じまして、オートバイで行くということで、単なるオートバイ野郎の罪のない突っ走りで行くというところで、進めておりました。

これは見事に成功しました。私自身の魂胆は勿論徹底的な調査でありまして、今まで二十年、三十年来の私のロシア研究の一つの総決算をしようというような気持ちで参りました。

その中から得た幾つかの見聞で、ほとんど日本で紹介されていない幾つかの事実、そういうものに基づいて、一体全体、ペレストロイカというものがどうして起きてきたのか。

案外この辺が、日本のマスコミにも出ておりませんし、恐らく我々のソ連研究者の間でも余り正しき理解がされていません。

この辺から理解しませんが、実は今の混乱の原因も判りませんし、将来の見通しも出てこないというので、ちよいと時計の針を戻しまして、ペレストロイカの成り立ちから簡単にご説明させていただきますと思います。

ロシアの田舎を走つていまして、あちこちで目につくのがぶつ壊れた教会でございます。これは、勿論「存じ」のように、共産党政権は反宗教政策をやりまして、徹底的に宗教を弾圧したわけでございます。特に僕が愕然としたのは、教会が共同便所になっていたことでした。

さて革命前のロシアは農業国でございまして、工業はまだ未発達でしたけれども、この農民が国力の支えになっておりまして、しかも良質の麦なんかをとれましたから、これを大量に輸出して相当豊かな国だったわけですね。

昨日五月二十七日は、日本海軍の戦の記念日ですね。実は、それをなぜ知ったかといいますが、ソ連のテレビを見て知りました。

ソ連のテレビでそれを指摘して、ロシアは自分の力の数倍ある強大な日本海軍と戦つて惜しくも破れたという放送をしてるんですね。全く歴史の事実はその逆ですが。



のモラルでした。マルクスは人類の歴史は闘争の歴史であるところを述べたわけですね。まさにこれは強い者が勝つて弱い者は死に絶えていく、こういう非常に荒々しい倫理でとらえていた。

そして、国家の富国強兵をやつたわけですね。私がイルクーツクというバイカル湖のほとりの町の中心を歩いていたら、突然若者が二、三人やってきて「おい、そこを見ろ」と言うんです。

町の中心の共産党本部の建物を指さし「おまえ、ここに何があつたか知ってるか」「知らん」「教えろ」と。外人が知る筈はないだろう。

実は、ここには、ウラル山脈から東で最大の教会があつた。この教会をソリシエビキ政権が権力を握った途端、ダイナマイトを仕掛けてあつた間に粉々にした。その基礎の上に共産党本部を建てました。

そこで、その若者達は「そんなことをしたら共産党は駄目になった」。

こんなこと言うことは、従来のソ連に絶対になつた。国民は言うことを言えませんでした。

これは勿論ペレストロイカが出てきたグラスノスチ情報公開です。共産党の批判をしていいぞという方針をえなんですが、そういうことを公然と言えるようになったロシアの人々が非常にうれしそうに、生き生きしているんですね。

一体なぜ、あれほど強固な共産党の体制、全体主義的な体制によって押さえていたものが、突然ペレストロイカという一大変革を始めたかというのを、チョット申し上げたいと思つています。

これは、やはり一九八〇年頃から、ブレジネフ時代の末期になつて、いろいろ不都合が生じ始めた。特に経済にたがははじめたわけですね。

それまで、ソ連は、強大な資源力を駆使しまして、特に石油ですね。実は世界最大の産油国はソ連なんです。どれくらい油があるか判らぬ。まだどこに油があるか完全な探査を終わっていないという途方もない国でして、その他天然ガスに至つては、どれ位あるか、まだ埋蔵量が全部計算されていません。

それから、金は世界第四位、プラチナは世の銀だといつて海に捨てていたほどワラルととれまし

ニッケルに至つては、世界最大の輸出国です。そんなぐあいでは、資源がやたらにあるものですから、こういうものを売り飛ばしては食いつないで、経済のほうはいかげんにやつていなければいけません。それが一九八〇年には大分がたがきていました。

ところが、一般レベルの人たちまでが、これは危ないぞというような感じを持ち始めたのは、実は、アメリカの月への宇宙飛行士、人間の事件でした。

コンピュター

なゼソ連はアメリカに先を越され月間に人間を送れなかつた。これははつきり言ひまして、その高さに達して下降地点に入った段階に、その姿勢、経路、軌道を計算しまして、落ちる前に撃ち落してしまつてという計画でした。

実は、今でも、ソ連が持っている千数百発、或は大量の大陸間弾道弾を、撃ち落とせる能力なんかはアメリカにもありません。

しかし、ソ連はそれを非常に深刻に受け取つたんです。それ程ソ連にコンピュターがなかつた。

マイクロエレクトロニクスとか、マイクログラフという非常に重要な技術が、ソ連には非常に不足している。例えは卓上電卓ですが、あのようなレベルでも、一九八〇年代の初めは、ソ連は恐ろしく西側各国からおくられていました。

当時の書記長であったブレジネフが死んだ後、KGB長官であったアンドロポフが書記長になりましたが、この人は、アメリカのSDI計画を、我々ソ連の非武装化武装解除を行う計画であると言つ

目次

- 「CISの行方」 ①-③
- 瀧澤 一郎氏
- 「組員たより」 ④
- 「業務報告」 ④
- 「組員有志」
- 「岸中見舞連名広告」
- ⑤-⑥

工業蒲田

(前頁より)

て非難したんです。
特に一番恐怖感を持ったのは、ソ連の軍部でした。
実は、ソ連でコンピューターの研究がそれ程おくれたりした理由には、ほかならぬ共産党自身の責任なんです。
どうしてかといいますと、一九五〇年代の前半を通じて、ソ連でコンピューターの研究をしますと信じられないかもしませんが、マルクス・レーニン主義に反した反マルクス理論を研究する者として、烙印を押され、後ろに手が回りシベリア送りになりました。
ソ連の反体制活動家という人達の中に、数学者とか物理学者は非常に多いですね。
それは実はこの理由なんです。いざいざにしても、共産党のせいでコンピューター科学がおくれたりしたというところを、八三年ごろ、初めて共産党の首脳たちが過去を振り返ってみてわかったわけです。
また、当時、そういうような危機意識を持たせた一つの原因として、「連帯」という運動からポーランドの共産党がたがたになってきたという事実がありました。
とにかくソ連共産党の中央にも我々も官僚主義のさばって、いざいざと、何も反省しないでやっていたら、ポーランドの共産党のようになるぞという声が非常に高く上がってきました。
私が、何故こんなことを申し上げますかという、アンドロポフの死んだ後、ほんの短い間、書記長になったチエルネンコという人がいました。
この人は、重要会議で、共産党は間違っていたこともある、スターリン体制のもとで、何千万人

とシベリア送りにして殺してしまつたことも含めて、みんな国民に信を問わなければ、共産党の言うことを聞かなくなるぞというように、なことを言っているんです。
その中に、コンピューターのことについても、共産党の過ちゆえに今こんなにおくれたりしたというところを、これもはつきり反省しなければ駄目だということが書いてあります。
そんなことで、一九六〇年代の初めごろ、ソ連は、スパートニクとか宇宙ロケットをどんどん上げて、世界では先端の自然科学技術先進国として我々も見ていましたが、実は内情は非常に寒い状態だったわけです。
しかし宣伝としては効果が上がっていました。
アメリカが当時打ち上げていたサッカイボール大の宇宙船は、中にぎっしりICが詰まっていた。
ソ連のやつは一トン、二トンなんですけれども、中ががらんとしたんだって。
一番はつきりしてきたのは、ミサイルの誘導能力であります。
ああしたロケットの誘導とか、航空機の誘導には、すべてジャイロが必要でございす。
既に今は機械的なジャイロじゃなくて、レーザージャイロとか、そういう時代になっているわけですから、これにもみんな高度なマイクロエレクトロニクスが必要不可欠です。
しかし、ソ連は、いまだに機械式ジャイロなんです。機械式ジャイロですからソ連のミサイルは極めて命中精度が悪いんです。
ソ連という国は、振動論といいますか理論の面では世界最高レベルですが、実用は駄目だということ

が、ここにも一つあらわれているんです。
何んといつても、理論的な基礎理論ができて、それをつくるのは、ねじ一本から、長い蓄積された職人技術にのつとっているわけです、ソ連の工作機械とか、そういうものの精度が悪いというのは昔から知れています。しかし大きいのは、すごいんです。
旋盤なんか、加工直径が十センチ、このままじゃ、ソ連という国は立ち行かない。
国防力でもアメリカに決定的に水をあけられた。
経済も石油がじり貧になって、悪くなってきた。
本当に共産党というものを徹底的に内部改革して、官僚主義にと

つぶりつかっている無能なダラ幹は全部首にして生まれ変わらなければ、共産党自体が国民からそっぽを向かれて駄目になってしまうという意見が、強い勢力をしめ始めたわけなんです。
そういう仲間が押し上げたのがゴルバチョフです。
勿論ゴルバチョフは、一番批判的な急先鋒であったことは確かです。
あれだけの若い年令でソ連の共産党の最高権力者に立ち上ったわけですから、これはただ者じゃありません。
彼は、やはりペレストロイカをやするには単なる手直しじゃ駄目だ。アメリカからコンピューター技術を輸入するよきには、徹底的にもアメリカの言うことを聞いて、軍縮しろと言ったら軍縮したついでいじやないか。
ソ連にはがらくたミサイルばかりあるんだから、ミサイルなんか半分減らそうが、三分の一にしようが、もう変りはないんだ。
どんでん軍縮をやれ。
よく、ペレストロイカをする時に軍部が反対する、アメリカとの緊張緩和を、ソ連軍を削減すると軍が反対する、こういうふうなソ連の専門家の方もおるんですけれども、実は逆なんです。
あの時、ペレストロイカをやってくれ、どんでんアメリカからハイトクを入れてくれとゴルバチョフをつっついていていたのは、実は軍部なんです。
それで、アメリカとの緊張を緩めるため抜本的な改革が始まったわけなんです。
ですから、INFなんて、今までの時勢に乗り上げていたような交渉が一気に進むようになった。

ペレストロイカ

最初はレーガン大統領は、ソ連にやられたという怨念を持っていたわけなんです。
ゴルバチョフさんのおいさん、奥さんのライサさんの母方のおいさん、おばあさん、父方のおいさん、おばあさん、皆スターリンにやられているんです。
ですから、もしかするとゴルバチョフは、共産党の書記長になって、共産党の権力の縮小、或は共産党のとりつぶしにかかったと思われまふ。
そういうことがありまして、反共産党の怨念というのは物凄く強いわけです。
これは燎原の火のように燃え上がってきました。
そして、そのなだれに結局は、ゴルバチョフ自身もやられた。だれにも押しとどめられない力であつたわけなんです。
この反モスクワ、反中央の強大な政治の流れというのは、従来無理やり抑えつけられていた各民族の独立心を刺激したわけなんです。各民族の人たちが自分たちのアイデンティティとみずすものは、当然、自分たちの民族の血であり、歴史であり、文化であるわけなんです。こういうものに目覚めた人たちが、当然、独立運動を行う。
そして、さらに旧ソ連にとって悪いことには、この流れの火に油を注ぐような形になったんです。それは何かと申しますと、エリツィンとゴルバチョフの権力闘争であります。
エリツィンさんという人は、共産党内部でかなり改革派の考えを打ち出していた人ではあります。が、しよせんは生まれつき共産党員です。
共産党的な価値観と、先ほど申した共産党的な斗争心に富んだ人でありまして、彼自身も非常に野心家でありまして、ゴルバチョフと最後は、争いになったわけなんです。
しかし、ゴルバチョフの方がはるかに役者が一枚上で、共産党から追い出されてしまったわけなんです。しかし、この追い出されたエリツィンは、当時、非常に盛り上がりつつあった反共産党運動の親玉になつてやろうと考へたんです。
そして、それは見事に成功したわけなんです。
つまり、どんでん燃え上がって強くなる火に油を注ぐ役をエリツィンはしたわけなんです。
そして、このゴルバチョフが立っている権力の座のはしごを外してしまうというところを、これは、ソ連共産党の権力斗争において典型的なやり方でございます。
ところが、エリツィンは、この火にどんでん油を突っ込んでいまして、ゴルバチョフの後がまとい地位に座つた途端に、これは邪魔になるわけなんです。
むしろ、この火を全部、瞬間にして消したいわけなんです。しかし、政治の流れというのは、簡単にストップしたり、方向を変えたり、そんなことはできないものです。
これが今、エリツィンの最大の悩みであります。
エリツィン大統領の占めていたロシア連邦さえ、十六の自治共和国があり、みんな独立、独立と叫んでいます。
反モスクワは、もうとまらなくなつていまして。
このロシアの中に、百十幾つの民族がいるんです。



つぶりつかっている無能なダラ幹は全部首にして生まれ変わらなければ、共産党自体が国民からそっぽを向かれて駄目になってしまうという意見が、強い勢力をしめ始めたわけなんです。
そういう仲間が押し上げたのがゴルバチョフです。
勿論ゴルバチョフは、一番批判的な急先鋒であったことは確かです。
あれだけの若い年令でソ連の共産党の最高権力者に立ち上ったわけですから、これはただ者じゃありません。
彼は、やはりペレストロイカをやするには単なる手直しじゃ駄目だ。アメリカからコンピューター技術を輸入するよきには、徹底的にもアメリカの言うことを聞いて、軍縮しろと言ったら軍縮したついでいじやないか。
ソ連にはがらくたミサイルばかりあるんだから、ミサイルなんか半分減らそうが、三分の一にしようが、もう変りはないんだ。
どんでん軍縮をやれ。
よく、ペレストロイカをする時に軍部が反対する、アメリカとの緊張緩和を、ソ連軍を削減すると軍が反対する、こういうふうなソ連の専門家の方もおるんですけれども、実は逆なんです。
あの時、ペレストロイカをやってくれ、どんでんアメリカからハイトクを入れてくれとゴルバチョフをつっついていていたのは、実は軍部なんです。
それで、アメリカとの緊張を緩めるため抜本的な改革が始まったわけなんです。
ですから、INFなんて、今までの時勢に乗り上げていたような交渉が一気に進むようになった。

(次頁へ)

業務報告

一月六日 仕事始め
機関紙「工業蒲田」新年号発行
主な記事
石森理事長年頭へ挨拶。
新春放談あれこれ。
柴又七福神初詣 掲示板。
蒲田工業会館の集会至利用案内。
青年部「加入案内」
組合員だより。業務報告。
組合員有志新年連名広告。
一月七日 機関紙「工業蒲田」速報版発行
主な記事
節税教室。
一月十日 新春講演会
テーマ「本年の景況と企業経営」
講師 経済評論家・国際エコノミスト 長谷川慶太郎氏
新春賀詞交歓会
一月十二日 柴又七福神初詣(木

鶏会)
二月二十一日 青年部経営サロン
(木鶏会)
主な話題
新春講演会について。
若年労働者の採用について。
能率給について。
取引先への贈答について。
出席各社の景況について。
二月二十三日 正副会長会議(木鶏会)
二月二十七日 講演会(木鶏会青年部)
テーマ「社会主義経済の崩壊」
講師 青山学院大学教授 寺谷弘王氏
二月五日 定例経営サロン(木鶏会)
主な話題
景況悪化について。
外人労働者について。
下請企業に対する支払条件変更について。

二月七日 機関紙「工業蒲田」速報版発行
主な記事
経営セミナー開催のお知らせ。
二月十八日 幹事会(木鶏会)
二月十八日 青年部経営サロン(木鶏会)
主な話題
青年部役員改選について。
経営者・従業員の健康管理について。
二月十八日 講演会(木鶏会青年部)
テーマ「いまだ結核で死ぬなんて」
講師 大田区総合保健所長 鈴木和子氏
二月二十日 中小企業貸金事情配

布
三月四日 定例経営サロン(木鶏会)
主な話題
金利の低下と景況について。
時短と賃上げについて。
経営者と従業員の賃金と生活について。
自動車産業の下請工場の採算について。
下請の反乱について。
三月三十一日 朝食会(木鶏会)
於高輪プリンスホテル
三月十七日 青年部経営サロン(木鶏会)
主な話題
時短と賃金・生産性について。
時短以外の中小企業の魅力について。
ある倒産会社について。
自社の将来の姿について。
三月二十三日 技術指

導講習会「やさしい図面の見方」
三月三十日 第十一回通常総会(木鶏会)
三月三十日 研究会(木鶏会)
テーマ「中小企業生産技術」
講師 東海大学開発技術研究所 教授 唐津 氏
三月三十日 懇談会(木鶏会)
四月一日 定例経営サロン(木鶏会)
主な話題
下請の反乱について。
木鶏会の目的について。
会員は何を求めているか。
四月二十日 常任理事会
第四三回通常総会議案を異議なく夫々原案通り可決。
四月二十一日 青年部経営サロン(木鶏会)
主な話題
自動車産業の見通しについて。
運送機械の状況について。
従業員の整理について。
不採算部門の整理について。

主製品得意先とのパイプについて。
手形取引について。
借入金と担保について。
四月二十一日 企業見学会(木鶏会青年部)
見学先 (株)長崎屋物流センター
五月一日 機関紙「工業蒲田」速報版発行
主な記事
第一三二回平日休日のお知らせ。
自動車ローンは組合で。
中小企業設備近代化資金案内。
五月八日 理事会
第四三回通常総会議案を異議なく夫々原案通り可決。
五月十一日 監査会
五月十三日 正副会長会議(木鶏会)
五月十三日 定例経営サロン(木鶏会)
主な話題
人口形態の変化・製造業の将来。

年功序列給と能率給について。
大企業と中小企業の系列化について。
メッキ工場数の減少と規模について。
飯金工の養成と独立について。
不況の波について。
五月十九日 青年部経営サロン(木鶏会)
主な話題
景況について。
カード被害について。
外人労働者の電話料等の取扱いについて。
運送・梱包費等について。
五月二十八日 第四三回通常総会
1、平成三年度事業報告承認の件
2、平成三年度決算報告承認の件
3、平成三年度剰余金処分案承認の件
以上原案通り可決決定。
4、平成四年度事業計画案承認の件
5、平成四年度収支予算案 賦課金額並びに徴収方法を含む承認の件

6、平成四年度借入最高限度額決定の件
7、平成四年度一組合員に対する貸付最高限度額決定の件
8、平成四年度手数料最高限度額決定の件
9、定款一部改正の件
10、任期満了に伴う役員改選の件
以上全案原案とおり可決決定。
五月二十八日 講演会
テーマ「CISの行方」
講師 防衛大学校教授 瀧澤 一郎氏
五月二十九日 機関紙「工業蒲田」速報版発行
主な記事
節税教室。
第四三回通常総会議決報告。
大田区の夏季宿泊施設の利用について。
自動車ローンは組合で。
六月三日 定例経営サロン(木鶏会)
主な話題
新規の仕事の取扱について。
下請企業の景況について。
納期管理について。
経営者の健康管理・親子関係。
六月十六日 青年部(木鶏会)
東京都中小企業団体青年部協議会通常総会及び東京大会
役員改選により当青年部長小林 意彦氏会長に就任。
六月十八日 常任理事会
1、平成四年度予算について。
2、職員夏季手当について。
六月二十三日 青年部経営サロン(木鶏会)
主な話題
モーニングセミナーについて。
米国事情について。
タイ国内の合弁会社設立について。
従業員の健康について。
以上



組合総会・懇親会

木鶏会・懇親会

組合員だより

計報
山田眞治氏
有限会社山田
製作所前社長
(大田区大森南
一九一三)は
去三月十日、
病氣療養中にと
ころ、逝去されま
した。
謹んでご冥福を祈念申上ります。
寺田徳太郎氏 寺田産業豆乳会
社(大田区大森南一―一五)
代表者寺田叔氏に父君は、永
らく病氣療養中にところ、薬石効なく
去る三月十日、逝去されました。
ここに謹んでお知らせ申上ります。
衷心より、冥福を祈念申し上げます。
以上

以上

暑中御見舞申上げます

蒲田工業協同組合員有志

(五十音順)

機械器具製造業

尼寺空圧工業株式会社
代表取締役 尼寺春一

大阪伸栄工業株式会社
代表取締役 鶴巻英樹

合資会社 大津鉄工所
代表取締役 大津暢

岡田鋳金株式会社
代表取締役 増田道造

株式会社 弘機商會
代表取締役 坪根五久代

坂口精密工業株式会社
代表取締役 坂口俊夫

炭研精工株式会社
代表取締役 永井彌太郎

ティヴィバルブ株式会社
代表取締役 竹内栄多

株式会社 東京精密器具製作所
代表取締役 西ヶ谷静司

長坂精機株式会社
代表取締役 長坂基秀

株式会社 日産電機
代表取締役 中村國男

日本チエンギヤ―無段変速機株式会社
代表取締役 加藤進弘

有限会社 富士精機製作所
代表取締役 荻野幸男

藤田工業株式会社
代表取締役 藤田雅康

株式会社 藤原製作所
代表取締役 藤原長作

株式会社 文化精工
代表取締役 桑原久直

株式会社 妙徳
代表取締役 伊勢養治

株式会社 山田精機製作所
代表取締役 山田重利

電気機械器具製造業

出雲電機株式会社
代表取締役 雲野和信

株式会社 小林電機製作所
取締役社長 小林竹平

太産工業株式会社
取締役社長 千葉博

株式会社 東電舎
代表取締役 石森憲蔵

株式会社 中山電機工芸社
代表取締役 中山致

永森電機株式会社
取締役社長 永森忠夫

株式会社 マコメ研究所
代表取締役 植村三良

輸送用機械器具製造業

江崎工業株式会社
取締役社長 江崎武

荏原工業株式会社
取締役社長 長井俊樹

株式会社 大谷造機所
取締役社長 大谷文雄

暑中御見舞い申上げます

蒲田工業協同組合

(五十音順)

顧問 千葉博
相談役 海老名正教

理事長 石森憲蔵
副理事長 西ヶ谷勝美
会計担当 市川宗紘
専務理事 赤井弘志

常任理事 杉谷順弘
常任理事 増田道造
常任理事 新井陽一

理事 岩崎登喜雄
理事 大谷文雄
理事 加藤進弘

理事 川瀬純一
理事 工藤勝広
理事 小林章彦

理事 鳥海保男
理事 長井俊樹
理事 長坂基秀

理事 西野三郎
理事 野口喜広
理事 福島喜勝

理事 正田竜三
理事 事務局長 豊間厚

監事 中山致

暑中御見舞申上げます

蒲田工業協同組合員有志

(五十音順)

(前頁より)

輸送用機械器具製造業

株式会社 清川製作所
代表取締役 川瀬純一

株式会社 東京スピンドル製作所
代表取締役 堀井脩市

株式会社 鳥海製作所
取締役社長 鳥海保男

日本中空鋼株式会社
代表取締役 市川宗紘

株式会社 ユタカ製作所
取締役社長 石田啓介

金属製品製造業

株式会社 旭川製作所
代表取締役 武田弘

佐々木発條株式会社
代表取締役 佐々木良彦

シンドー工業株式会社
代表取締役 信藤秀夫

第一シャーリング工業株式会社
代表取締役 福島喜勝

東亜株式会社
代表取締役 小柳隆

トヤマ機器工業株式会社
取締役社長 能登厚

同和発條株式会社
取締役社長 川島慎治

株式会社 羽田パイプ製造所
取締役社長 野口広

有限会社 早崎製作所
代表取締役 早崎吉春

株式会社 松原製作所
代表取締役 松原一喜

プレス・鍍金・製罐業

株式会社 赤井製作所
代表取締役 赤井弘志

株式会社 新井久四郎鉄工所
代表取締役 新井陽一

株式会社 内田製作所
取締役社長 内田正勝

株式会社 内原製作所
技術課長 内原康雄

株式会社 榎田製作所
代表取締役 榎田幸司

協和鍍金株式会社
代表取締役 服部和央

株式会社 清水鉄工所
代表取締役 清水重幸

大和部品株式会社
代表取締役 今井敏夫

多田プレス工業株式会社
取締役社長 多田嘉之

株式会社 東亜製作所
代表取締役 古橋透

株式会社 蛭田電機製作所
代表取締役 蛭田好勝

メッキ業

エビナ電化工業株式会社
代表取締役 海老名平吉

株式会社 三協アルマイト
代表取締役 岩崎登善雄

鋳物・鍛造業

恩田鉄工株式会社
取締役社長 武井武

有限会社 京浜鋳造所
代表取締役 神道晃

その他

岩佐工機株式会社
代表取締役 岩佐勇

河原テント株式会社
代表取締役 河原祥浩

株式会社 気球製作所
代表取締役 豊間厚

杉谷金属工業株式会社
取締役社長 杉谷順弘

合資会社 ニシノ
代表社員 西野三郎

株式会社 日章機械
代表取締役 小林章彦

株式会社 日伸製作所
取締役社長 富田耕平

三津浜工業株式会社
取締役社長 木々津栄一